中学生部門　愛知県最優秀賞

「祖父から学んだこと」

西尾市立幡豆中学校　三年

村松　花南

私の祖父は今年で八十二歳になります。座っていれば見た目は優しいおじいちゃんといった感じです。けれど、足にはボルトが入っていて、歩くときには足を引きずります。声は声帯がなく、喉に穴があいているため、話すことができません。障害の程度でいうと、私の祖父は身体障害者二級の区分に当てはまるそうです。足の障害は、祖父がまだ働き盛りの若い頃、仕事中にトラックの荷台から落ち大腿骨をひどく骨折したことにより負ってしまったそうです。声の障害は、六十代、七十代の時と二度にわたり咽頭癌を患い、二度目の手術の時にどうしても声帯を取らなければ治すことが難しく声を失ってしまいました。

母に聞いた話では、祖父はまだ母が保育園に通っていた頃、子供たちが小さいにもかかわらず、アフリカに学校を建設に行くボランティアに参加するために、祖母や母を残して旅立ち何年も帰ってこなかったことがあるそうです。その後、日本に戻ってきてからも、人の役に立つことが好きだった祖父は、奉仕活動や、ボランティアに参加することが多く、よく家を空けることがあったそうです。この話からもわかるように祖父はとても自由で活動的で、まさに天真爛漫というような人だったようです。

そんな自由な祖父が足や声に不自由さを味わうようになってしまった時、どんな気持ちだったのかどうしても気になり、私は祖父に尋ねてみました。

祖父とは会話ができないので筆談で話をします。私はメモ帳に「おじいちゃん、足をケガした時と二回目の癌の手術の時ってどんな気持ちだったか聞いてもいい？」と書き、祖父に手渡しました。祖父はしばらくその紙を見つめていましたが、ゆっくりとペンを動かし始め「そりゃあ、その時はつらかったな。ケガしてからは遠くへも行けんくなったし、やりたい仕事もできんしな。その上、年とってからに声もとられた」と書いた紙を私にそっと渡してくれました。私はそれを読み終え、祖父の顔を見た瞬間、やっぱり聞かなきゃ良かったと後悔しました。祖父のなんとも悲しそうな顔に私は申し訳なさを感じ目に涙がたまってくるのがわかりました。しかし、そんな私に祖父はまたペンを動かし一枚の紙を手渡してくれました。そこには、「でもな、命があるでありがたい。それだでおまえたち孫にも会えるしな。幸せだよ」と書いてありました。祖父につらい思いを思い出させてしまったと後悔する私は逆に祖父からなぐさめられました。

祖父は障害を負ってから私には想像することのできない苦しみや大変さがあったと思います。ですが、それを乗り越え祖父らしく八十歳を過ぎた今も生き生きと暮らしています。自分一人で歩ける距離は短いですが、天気の良い日には散歩を楽しみ、また声の変わりに書くことに楽しみを見つけ、今は自称、小説家と言いながら、原稿用紙に向かう日々も楽しんでいます。

ですが、祖父にはどうしても難しいこともあります。足が曲げられないので、一人での着替えや入浴が難しく介助が必要です。買い物や通院など距離のある移動にも付き添いが必要です。また、声が出ないので対面での筆談でしかコミュニケーションがとれません。しかし、これらの祖父にとって難しいことは周りの助けがあれば難しいことではなくなります。中学生の私には祖父にしてあげられることはまだまだ少ないですが、着替えや入浴の介助、筆談で会話を楽しむなど自分にできることを探して祖父の力にこれからもなりたいと思います。

私たちの周りには祖父だけでなく、様々な障害を抱えた方たちがいます。ですが、周りの誰かの優しさや思いやりの行動で難しいことも出来るに変わります。みんなが心をつなげ、誰もが暮らしやすい優しい社会になっていってほしいと思います。